

平成18年6月の解説（週間天気予報）

【6月の天候状況】

南西諸島を除いて、上旬の中頃までは高気圧に覆われて晴れる日が多くなりましたが、上旬の終わりに低気圧が通過した後は、月末まで前線や低気圧の影響を受けて曇りや雨の日が多くなりました。一方、南西諸島では月の前半は梅雨前線の影響を受けて曇りや雨の日が多くなりましたが、月の後半は太平洋高気圧に覆われて晴れの日が多くなりました。

月を通しての日照時間は、東日本と西日本では平年並でしたが、北日本と南西諸島では平年より少なくなりました。降水量は北日本の太平洋側と南西諸島では平年より多く、東日本では平年より少なくなりましたが、そのほかの地方では平年並でした。気温は北日本と南西諸島では平年並でしたが、そのほかの地方では平年より高くなりました。

【6月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7日目の平均）は全国平均では例年^{（注）}より3ポイント高い65%でした。例年と比べて東北地方では4ポイント、関東甲信地方では5ポイントそれぞれ低くなりましたが、四国、九州北部、沖縄地方では7から11ポイント高くなりました。最高気温（2～7日目の平均）の予報誤差は全国平均では例年より0.3 小さい2.5 で、ほぼ全国的に例年より小さく、特に関東甲信、北陸地方では0.9 小さくなりました。最低気温（2～7日目の平均）の予報誤差は全国平均では例年より0.4 小さい1.5 で、ほぼ全国的に例年より小さく、特に関東甲信、北陸地方では0.7 小さくなりました。

（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【6月の週間天気予報から】

6月23日、本州南岸から九州にかけて停滞した梅雨前線（図1）の影響で西日本では広い範囲で雨となり九州では日降水量が100mm以上となった所もありました。一方、東日本で雨が降ったのは太平洋沿岸の一部だけでした。

16日（7日前）の週間天気予報では、23日の東京地方の天気を曇り一時雨と発表しました。図2はその際に使用した予想図です。本州付近に気圧の低い部分が東西にの

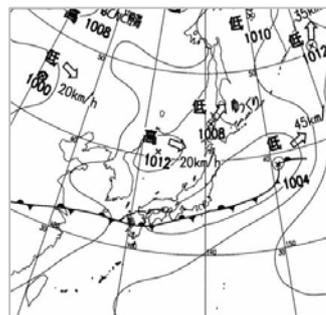


図1_2006年6月23日21時の地上天気図

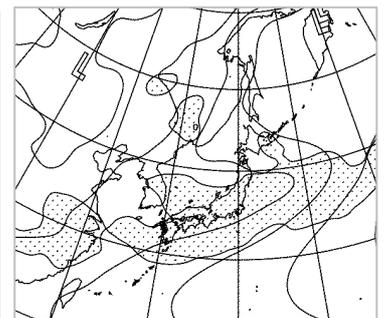
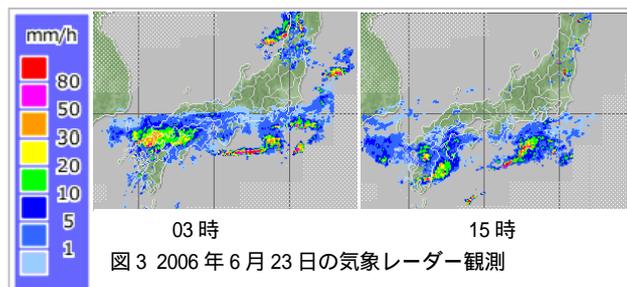


図2_6月16日に使用した6月23日21時の予想図：ハッチは前24時間に降水が予想される地域

びていて、それに対応して東日本から西日本にかけて広い範囲で降水が予想されています。このことから梅雨前線が本州付近に停滞し、関東地方でも広い範囲で雨になると判断しました。実際にも地上気圧のパターンは概ね予想に近く（図 1）、気象レーダー観測（図 3）



03時 15時
図3 2006年6月23日の気象レーダー観測

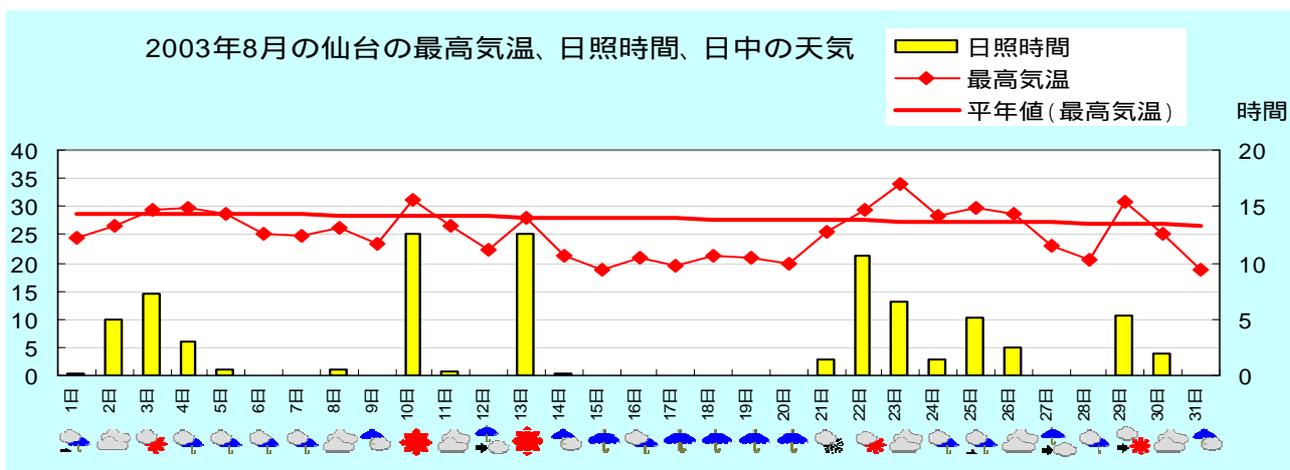
に見られるように、雨雲も梅雨前線に沿って東西に連なっていました。東京地方は曇りで日降水量が1mm以上となった観測地点はありませんでした。

梅雨前線付近では曇りや雨の天気となりやすいのですが、前線の位置や前線上の小さな規模の低気圧の動向などによって雨の降る範囲や時間帯が変わります。現在の予報技術では、期間が先になればなるほどこうした細かい予測の精度が落ちることは避けられず、週間天気予報で雨の範囲や時間帯などを確実に予報をすることが難しい原因となっています。

【8月の週間天気予報の利用にあたって】

8月は太平洋高気圧に覆われて晴れて暑い日が多くなりますが、天候は必ずしも毎年同じように経過するわけではなく、年によって大きな違いがあります。

2003年の8月は低気圧や前線の影響で曇りや雨の日が多く、大雨による災害がしばしば発生し、月の平均気温は全国的に平年に比べて低くなりました。このため低温と日照不足で東北地方の太平洋側から東海地方にかけて水稻をはじめ農作物に大きな被害が発生しました。不順な天候は東北地方の太平洋側で顕著となり、仙台では8月の日最高気温が30を超えた日は3日だけで、1か月の日照時間合計は77.1時間と平年の50%しかありませんでした。



8月に週間天気予報で曇りや雨の日が続くような予報が発表されているときには、平年より気温が低い状態が続くおそれもありますので、予想気温にも注意して農作物等の管理を万全にしましょう。また夏の雨は時として大雨となるおそれがありますので、各地の地方気象台などが発表する防災気象情報にも注意してください。